

特定非営利活動法人

おかやま人権研究センター・ニュース

発行 センター事務局 2011. 2. 10 第11号

下からの民主主義の力で前進

鈴木良「部落問題解決過程」 菅木一成さん報告

当初、平島さんの「榊・北原会

談を巡って」ということでご案内していたところ、平島さんの都合が急に悪くなり、菅木さんから、ピンチ・ヒッターとして、表題のような報告をいただきました。

報告されたテーマは、目下京都の研究所から刊行されつつある『部落問題解決過程の研究』第1巻を飾る、鈴木先生の「歴史の中の部落問題とその解決過程」の紹介、検討でした。

鈴木説をかいつまんで述べれば、部落差別は、近代以前の産物であるが、明治以後も存続し、戦後農地改革、高度成長をへて、民主的運動の成長の中で次第に解決過程を迎えている、ということ

になります。

鈴木先生の研究は、「研究の弱点」「中世選民の成立・近世選民の身分へ」「近世日本の地域支配構造と部落問題」「戦後社会と部落問題」など、多岐にわたる、極めて包括的なものです。部落の形成からその「解決」に至るすべてを網羅する研究だと言えます。

とくに、冒頭におかれた従来の研究史の回顧など、学問的課題として「部落問題」を扱うとき、どのような問題があるかを考える上で、注意すべき論点を示していると言えます。

研究会の席上いくつかの問題が出され、いろいろにはなしあわれました。むろんその場で解決せず、多くは、今後の検討課題とされたよう

に思われます。

一つは、部落問題が解決過程にあるとき、これを学問的に取り上げることの実践的意義はどこにあるのか、といった疑問でした。理論と実践との関係に係わる大きな問題だろうと考えられます。

また、部落差別を考える際、「差別意識」を無視することは不可能なはずであるが、この差別意識がどのようにして形成されたのだろうか、といった疑問でした。意識、観念の形成を唯物論的に説明すべき課題が検討される必要があります。

今一つ話題になったのは、「身分」論でした。鈴木先生は従来の研究には「身分論が欠如」していたと断じられ「日本社会の特質的な」「社会諸関係の分析」が必要なことを力説しておられますが、その点をどう具体化していったらいいかといった問題です。

いずれも、今後とも、さらに深めていくべき課題だと思われます。

(い)